

山田太一にとって、たとえば寺山修司

林久登 スタッフ

私が寺山修司という男を知ったのは、20代の後半東京勤務をしていた1970年の頃だ。当時、新宿に新宿文化というATG作品を上映する映画館があった。その地下が確か前衛演劇をやっている「蠅座」だったと思う。怖くて入れなかったが…で、その一階で観た寺山の映画が『書を捨てよ町へ出よう』だった。

映画が始まると、突然スクリーンの中から「君の隣の女の子の手を握ってみろ！」というセリフが飛び出してきた。私は度胆を抜かれた。たまたま、隣の席に若い一人客の女性がいた。私はモゾモゾしながら何もできなかったことを鮮明に覚えてる。

彼については、前衛作家で詩人という程度の知識しか持ち合わせていない私だったが、最近、出版された「寺山修司からの手紙」（岩波書店・2015年）を読んで、彼が脚本家の山田太一と親交があったことを知った。

ある時、その話を映画仲間で見ると、何と仲間の女性

「さんが早稲田で2人と同じクラスだったと聞きビツクリする。しかも、その本の中に出てくる寺山の意中の「かずこ」という女性も同級生で、今は山田夫人となっているという。これには本当に驚いた。それからしばらく経って、同じ岩波書店から出た石坂和子著の手記「あの頃」を読んで、この3人に益々興味を抱き、「さんにいろいろ尋ねながら、私見を書いてみることにした。」

1954

年「さんが入った当時の早稲田の教育学部国語国文科は、120名で内、女性が30名とい



う学内でも女性が多いクラスだった。彼女によると、寺山も山田もいわゆる早稲田的バンカラ学生ではなかった。寺山は人なつっこかったが、自分の思ったことは抑えないでドンド

ン出すタイプだった。山田はその点静かですつきにくかった。しかし、ひとたび2人が文学などについて論じ始めると、クラスの連中はもっぱら聞き役となり、そのハイブローな議論についていけなかったという。寺山について「さんはこんなことを覚えていいる。ある時、寺山がクラスの女性たちと雑談をしていた。すると彼は何気なく持っていた鉛筆をポロツと落とし、それをしゃがみ込んで拾いながら、「何も見ていなかったからね」と言った。廻りの女性たちは「何よ！この人」「変な人ね」とあきれ返ったという。寺山はそんな性癖のある、いわば軟派。その点、山田は普通というか、まともだった。

そんな寺山は、入学当初から同じクラスの丸顔の美女石坂和子（現山田夫人）にご執心で、何かと付きまとい、同じ講義の時は必ず彼女の隣に座った。おおっぴらに寺山が言い寄ってくるので、高校まで女学校だった和子は戸惑いがあったようだ。そんな彼女に寺山は多くの詩を残している。その一、二をあげると、

かずこについて

（寺山修司詩集 角川春樹事務所）

十九才の

ぼくたちがいるならば

世界は不在でありましょう

いま時間は 小川の声たちとなり

この丘は

風だけが知っている

空を歌うな

かずこ あそこへふたりに帰ろう

遠さがやさしく青いので

不在のあなたに さあ

麦藁帽子は脱ぎすてて

駆ける

雲雀と

ぼくがいなくなるとかずこは

さみしい顔をするだろうか

ぼくはいなくなってみよう

ぼくはいなくなる

さあ、ぼくはいない

夕暮

世界がかずこに押しかける

すると かずこもない

詩人として早くから注目を浴びていた寺山だが、2年目の春、ネフローゼという腎臓病にかかり入院する。偶然異常を見つけたのは、和子で、それから、ちよくちよく見舞に行くことになる。病室での寺山の文学や詩についての話は、女学校育ちの彼女には、刺激的で新鮮だった。時々彼の短歌の原稿の清書を手伝ったりもした。

しかし、ある時、「彼女は俺の女だ。手を出すな」と、周りに言いふらされていることを知り、まだ結婚などの気持ちのなかった彼女は、一人の男に縛られるのを嫌って会うことを止める。寺山は病院からたびたび和子に手紙を出す、厳しい石坂家のチェックにかかり当人に届かない。自分の気持ちに伝わらないことにしびれを切らした寺山は、女性看護師に電話をかけさせ本人が電話口に出ると替わったり、また、ある時は、山田に手紙をことづけたりした。

寺山の使い走りなどで、彼女に手紙を渡していた山田だが、次第に彼女に惹かれていったのだろう。そこには友人の彼女を好きになる罪悪感のようなものが、あつたに違いない。彼女も寺山の独善的な周りを気にしない、アタックについていけず、穏やかな性格の山田の方に気持ち移っていったとしてもおかしくはない。在学中、グループで東北旅行や和歌山の旅行も一緒に行き親交を深めていく。やがて卒業（1958年）の時期がやってくる。病気が長引いた寺山は、入院生活が続く、やむを得ず退学届を出し、仲間が次々と卒業していくのを眺めながら、その年の夏まで、3年余りの闘病生活を強いられたことになる。

山田は松竹に入り、木下恵介監督の下、助監督につく。和子はNET(現テレビ朝日)に入社し、当時の女性としては初めて、アナウンサーに抜擢される。

2人は卒業や就活のドサクサで疎遠になっていたが、山田が彼女のスタジオを訪れたことで、再会し、焼けぼっくりに火が付く。

やがて2人は結婚を考えるようになるが、彼女は一人娘のお嬢さん。石坂家に相手が入らない限り結婚は難しい。そん

な時、当時の山田の上司、木下恵介は石坂姓を名乗ることに猛反対したという。「小糠3合あるなら婿入りするな」と、言われた時代。もつともな話だろう。

だが、そんな反対を押し切って、山田は石坂姓を名乗り、3年後の1961年に結婚する。そして、山田太一はペンネームとして残し、本名は石坂太一となる。それだけ彼女に対する想いが強かったと言うことだろう。寺山もその頃には退院して元気になり、篠田正浩監督の映画『乾いた湖』のシナリオを書き、「天井桟敷」を旗揚げし、意気軒昂、2人は別々の世界で活躍を始める。

それから、またたくまに20年余が経ち、山田はTV作家として『男たちの旅路』『ふぞろいの林檎たち』など次々と話題作を出し、名実ともにTV界の革命児となる。中でも、1983年に書いた『早春スケッチブック』というテレビドラマは、巷で大きな話題になる。あらすじはこうだ。

子連れ同士で結婚した夫、省一と、妻、都、こどもたち4人の平凡なサラリーマンの家庭に、突然一人の野放図な男が闖入してくる。そして、それまで取り繕っていた家族の結束がズタズタにされる。なんとその男は、都の連れ子の実父、

竜彦だった……

残念ながら私はこのドラマを見ていない。この作品に出てくるエキセントリックな男、竜彦は寺山をモデルにしていると言われている。

「おまえらは、骨の髄まで、ありきたりだ！」シナリオを読むと、まず飛び込んでくるセリフだ。失明寸前で余命いくばくもない男、竜彦が省一家の実の息子に向かって毒舌を吐く。「あんな親父と似た道を歩くな！自分を磨くんだけ。適当に生きるなんて考えるな。体裁のいい仕事について、女房をもらって、子供を作って、平和ならいい、なんて下らねえ人生を送るな！」と続く。

私は竜彦という男を、寺山をイメージして読んでいたので、作者が山田にもかかわらず、あの新宿の映画館の寺山のメッセージが蘇ってくる。暗闇の中でモノローグは止まらない：「かまうもんか、失敗したってあんたの名前を誰も知らない」まさにメフィストフェレスの囁きだ。

竜彦の標的にされる主人公の省一は、しがたないサラリーマンだが、4人家族で人並みの生活をしている。そんな普通の家庭に向かって竜彦は罵詈雑言を浴びせる。

「俺は家族のために一生懸命働いてきた。どこが悪い」と、省一は開き直る。だが、その刃はドラマの省一家だけに向けられているのではない。日頃ともすれば情性に流される生活を送っている私たち視聴者にも、突き刺さってくる言葉なのだ。山田は人間の可能性と限界、挑戦と挫折の相克を、身近な家庭ドラマの中で見事に描いて見せる。シナリオを読むだけで映像が浮かび上がってくる。

そんなメフィスト役の竜彦を山崎努が、ありきたりの小市民生活を送るサラリーマン省一に河原崎長一郎、その妻、都に岩下志麻がキャストイングされている。今からでも見てみたい。しかし、映画のように簡単に手に入るDVDと違って、このドラマ、今、DVD4本でプレミアが付き9万円もする。しかも見るのに7時間はかかる。とてもじゃないが手が出ない。竜彦は寺山修司がモデルなら、省一は矮小化した山田自身、そして都は現夫人の和子をイメージしたドラマと言えるだろう。

『早春スケッチブック』の放送中、当の寺山や岩下志麻の夫篠田正浩は、このドラマを楽しみにしていたという。そして、山田には放送が終わるたびに寺山から電話が入った。ド

ラマの終盤近くになった時、山田は寺山にこう言っている。

山田「この男（竜彦）を最後に死なすからね」

寺山「それはもう…おれ、死ぬんだから仕方ないよ」

そして、山田の書いたシナリオ通り竜彦はガンの手術を拒絶して死に、静かにドラマは終わる。それを追いかけるように4ヶ月後に、寺山本人も病死する。47歳という若さだった。これがドラマチックでなくて何なんだろう。山田は和子をはさんで、寺山に対する負い目はあつたと思う。そんな思いがこのシナリオに丸ごと出ていて切ない。

つまり、省一は自分（山田）である。自分を小市民的人間として登場させ、賢妻、都（和子）をはさみ、破天荒な天才寺山（竜彦）と対峙させている。山田は日頃クールでなかなか感情を表に出さないように見える。寺山死した時の弔辞においても淡々として物足りない。しかし、本心はそんなもんじゃなからう。若き多感な学生時代激しく文学論を交えた2人。寺山入院時のおびただしい手紙のやりとり。そして結果として、寺山が惚れていた彼女を手に入れた後ろめたさ。山田は心中、穏やかであろうはずがない。そんな心情がこのシナリオからそくそくと伝わって来る。

山田も寺山も家庭的には恵まれていない。寺山は母子家庭。

山田は早くに母を亡くした上、父は職を転々とし家庭団らんの味を知らない。一方の和子は親族に囲まれ過剰なほどの保護を受けたお嬢さん。その反動か、彼女は束縛されることを嫌ったが、山田は結婚後家族一緒の生活にこだわった。当時、女性アナとして草分け的存在であった彼女は、まだまだやりたいことはいっぱいあっただろう。だが、あきらめ家庭に入る。そして、家事、育児を一手に引き受けた上、作家の夫の作業も手伝い、外へ出る機会ほとんど失われた。それを一番分っているのは身近にいた山田自身だ。だから彼はこのドラマの最後に都と、昔の男竜彦との二人だけの時間をつくり、解き放っている。

和子は寺山の死を知った時『俺は長くないんだ』と言うのが彼の口癖だった。本気で聞いてあげなかったのが悔やまれる』と言っている。お互い若かったとはいえ、人目もはばからず一途に思いを寄せてくれた男、寺山。彼女の琴線に触れぬわけがない。

山田のこの作品は夭折した寺山へのレクイエムであり、長年にわたって彼の作家生活を支えた妻へのオマージュだろう。

「映画やテレビドラマは、誤解の上に成り立つ映像文化だ」と言った人がいる。つまり、脚本を演出者が勘違いして演出し、それを役者が違った意図でとらえ、出来上がった映像を観客が勝手に自分の世界で解釈する。だから面白いと言うのだ。私のこの「私見」も作者からみれば外れかも知れない。しかし、私にとつて「寺山修司からの手紙」に端を發した3人の人間ドラマのインパクトは強烈で、久しぶりに感動させられたというのが、率直な感想である。

早稲田時代の話を聞かせてくれた「さんに感謝したい。また、文中敬称は略させてもらった。私見も含め、ご健在のお2人に対し失礼があったかもしれないが、ご容赦願いたい。

【参考資料】

- | | | | |
|-----------|------|---------|-------|
| 寺山修司詩集 | 寺山修司 | 角川春樹事務所 | 2003年 |
| 寺山修司からの手紙 | 山田太一 | 岩波書店 | 2015年 |
| 図書「あの頃」 | 石坂和子 | 岩波書店 | 2016年 |
| 早春スケッチブック | 山田太一 | 大和書房 | 1983年 |